

報 告

年少児（3歳児クラス）を対象にした
4歳児発達相談における「SDQ」の活用の検討

植 松 勝 子

〔論文要旨〕

年少児（3歳児クラス）を対象にした4歳児発達相談の対象児の選定に、SDQ（Strengths Difficulties Questionnaire）を用いたが、対象児に4歳に満たない者が存在し、活用に疑問が生じた。そこで、2年間分の保護者と保育者のSDQの平均スコアをカテゴリーごとに4～6月生児と1～3月生児で比較検討したところ、保育者の男児の評価において、多動・衝動性と向社会性に関して、有意差が認められる結果を得た。支援の必要性の評価に関しては、おおむね [Low Need] の範囲内であった。集団における個人の発達評価のあり方や発達経過などを踏まえること等の検討が必要ではあるが、簡易的なスクリーニングとしては、活用可能であることが示唆された。

Key words：早期発見・早期療育支援，4歳児発達相談，SDQ

I. 問題と目的

平成16年に発達障害者支援法が制定され、軽度の発達障害児の早期発見・早期療育支援および就労までの途切れのない支援の基盤整備等が市町村の責務¹⁾とされた。市町村では、母子保健領域である乳幼児健康診査（以下、健診）において、発達障害児の早期発見および早期対応に向け、1歳6か月児健診、3歳児健診等で、新たなスクリーニング(M-CHAT, PARS等)^{2,3)}を取り入れている。しかし保護者が軽度の発達障害に気づくことは殆どない。実際には保育者が保育所や幼稚園という集団生活・活動の場で問題がある子どもとして発見されることが多い。ところが集団生活・活動の場で問題をもつ子どもとして発見されても、その多くは、保育者の「困りごと」として処理され、保護者に十分伝えられていない現状もある。知的障害の早期発見および早期対応について、1歳6か月児健診の導

入期の昭和50年代半ば頃から実行⁴⁾されてきたが、小枝⁵⁾らの指摘するように、『社会性』の発達（主に、対人関係における行動特性）について、3歳児健診までの段階では十分なスクリーニングは難しいのではないかと考えられる。

厚生労働省は、平成18年に発達診断のための健康診査マニュアル⁶⁾を策定し、5歳児において軽度発達障害の早期発見および早期対応を目的とする、健康診査の実施を呼びかけているが、5歳児健診を実施している市町村の数は少なく、また実施したとしても悉皆でなく、一部の対象児に限られたりして、健診の意義が十分反映できていない状況もある。

A 県 M 町において、平成22年度から、就学前の乳幼児期における発達障害児支援事業（事業名；発達障がい児支援ネットワーク事業）の基盤整備を進めてきた。その中心的事業の一つである、4歳児発達相談（年少児対象）のスクリーニングに関して、SDQ (Strengths

A Study on Application the Strengths and Difficulties Questionnaire for 4-year-olds
Development Consultation to 3-year-olds Children

Katsuko UEMATSU

中部学院大学看護リハビリテーション学部看護学科（研究職 / 保健師）

別刷請求先：植松勝子 中部学院大学看護リハビリテーション学部看護学科 〒501-3993 岐阜県関市桐ヶ丘2丁目1番地

Tel：0575-24-9346 Fax：0575-24-0077

[2691]

受付 14.10.30

採用 15.10.21

and Difficulties Questionnaire) を活用した。

この事業において、年少児（3歳児クラス）を対象にした理由は、集団生活を始めて10か月経過（4月入園児に対し、1月に確認する）したところで、集団適応の状況を確認し、次年度のクラス支援体制に反映させることであった。そのため、事業を年度内の1～2月にスクリーニング作業を終える必要が生じたが、4歳に満たない幼児が存在（17%）することになり、SDQを用いることに疑問が生じた。

このSDQは、英国のGoodmanら⁷⁾によって開発され、子どもの特性をよく捉えることができるとされており、子どもの困難さ(difficulty)のみならず、強み(strength)も評価できる点が他の質問紙調査と異なる特徴を持っている。日本語版は、小枝ら⁸⁾が、就学前の発達障がい児を簡単に診断・鑑別できる方法の一つとして、発達診断のための健康診査マニュアル⁶⁾の中で紹介している。SDQは本来4歳児以上を対象に開発されており、日本におけるSDQの評価については、平成18年に久留米大学の調査・研究⁹⁾によって、平均年齢4歳10か月の4歳児(年中児)において、英国の標準スコア範囲内であったとの結果が示されている。

しかし、SDQに代わる簡易的なスクリーニング方法が見当たらない現状では、SDQを4歳未満児に活用する場合の留意点等を検討する必要がある。

そこで、4歳児発達相談対象児とした場合の4歳未満児(1～3月生)の扱いをSDQの成績結果に基づき、4～6月生児と比較しながら検討することにした。4～6月生児を比較対象としたのは、平均年齢が4歳10か月となり標準スコア範囲内の年齢とされているからである。

なおSDQは保育者および保護者により記入される行動スクリーニング質問紙であるため評価者による評価のバイアスが生じる可能性がある。そこで保護者と保育者の評価の特徴についても考察することにした。

II. 方 法

1. 対 象

A県M町の平成23年度および24年度の4歳児発達相談の該当児を対象とした。平成23年度が123名、平成24年度が156名、合計279名であった。そのうち、保育所・幼稚園に通所・通園していた272名の児の保護者(主として保育している者)と、当該児のクラス担

表1 SDQ評価基準(支援の必要性の判断)

カテゴリー	Low Need	Some Need	High Need
	ほとんどない	ややある	おおいにある
①行為面	0～3	4	5～10
②多動・衝動性	0～5	6	7～10
③情緒面	0～3	4	5～10
④仲間関係	0～3	4	5～10
⑤向社会性	6～10	5	0～4
TDS(①～④の合計)	0～12	13～15	16～40

※東京都医師会 5歳児健診マニュアル参照

任である保育者のSDQの回答について検討した。該当する保護者および当該児はすべてM町在住であった。なお、保育者の所属別の対象児は、保育所178名(平成23年度76名、平成24年度102名)、幼稚園94名(平成23年度44名、平成24年度50名)であった。

2. 材 料

4歳児発達相談の対象児を選定するために用いたSDQは、①行為面、②多動・衝動性、③情緒面、④仲間関係、⑤向社会性の5つのカテゴリーから構成され、各カテゴリーはそれぞれ5つの質問で成り立っているために合計25質問から構成される。このSDQは行動スクリーニング質問紙で、それぞれの質問は、あてはまらない(0点)、まああてはまる(1点)、あてはまる(2点)の3件法で評価される。各カテゴリーの合計点は0～10点になり、カテゴリーの①～④の合計得点をTotal Difficulties Score(以下、TDS)と呼ぶ。カテゴリー⑤は、①～④と異なって逆転評価になるため、TDSに含めない。SDQの評価は、各カテゴリーとTDSそれぞれに、カットオフ値を定め、カテゴリーごとに支援の必要性を[High Need](おおいにある)、[Some Need](ややある)、[Low Need](ほとんどない)の3段階で評価(表1)する。M町の4歳児発達相談におけるSDQスコアの評価に関しては、東京都医師会「5歳児健康診査マニュアル」¹⁰⁾のカットオフ値を採用した。このマニュアルでは、英国のカットオフ値ではなく、久留米大学の調査・研究⁹⁾に基づき、日本人向けに検証されたカットオフ値を採用していた。

3. 手 順

保護者に対するSDQは、4歳児発達相談問診票と同封して郵送し、回答結果は郵送により回収した。保

育者に対するSDQは、各保育所・幼稚園のクラス担任に配布し、回答結果は各保育所・幼稚園の主任保育士・教諭を介して回収した。保護者が記載したSDQの回収数(率)は、平成23年度が120名(97.6%)、平成24年度が144名(92.4%)であった。また保育者の回収数(率)は、平成23年度が120名(100%)、平成24年度が152名(100%)であった。

回収されたSDQから4～6月生まれ(以下、4～6月生群)の男児31名(保育所20名、幼稚園11名)、女児28名(保育所17名、幼稚園11名)の計59名、1～3月生まれ(以下、1～3月生群)の男児34名(保育所23名、幼稚園11名)、女児34名(保育所16名、幼稚園18名)の計68名の保護者および担当していた保育者のSDQを抽出した。なお4～6月生群の平均年齢は4歳10か月(久留米大学の調査・研究⁹⁾でSDQの適用が可能であるとされた年齢)、1～3月生群の平均年齢は4歳0か月であった(年齢算定基準日:2月1日)。

4. 調査期間

保護者および保育者によるSDQによる評価は、平成23年度は平成24年2月3～17日および平成24年度は平成25年2月1～15日に行った。

5. 結果の処理

平成23年度および24年度の2年分のSDQについて、25の質問ごとのスコア(0～2点)の平均値およびカテゴリー(1つのカテゴリーについて5つの質問)ごとのスコア(0～25点)の平均値を算出した。なお、①～④のカテゴリーの合計となるTDSのスコアに関しては、本研究では扱わないことにした。分析は、評価者別(保護者と保育者)に年齢(4～6月生群と1～3月生群)・性別(男児と女児)に属性化し、SDQカテゴリー別に平均点を算出、評価者(保護者・保育者)、年齢(4～6月生群と1～3月生群)の平均値の差を一元配置分散分析・多重比較検定(Bonferroni/Dunn法)で行った。計算処理には、エクセル統計解析ソフトtatcel3 2010バージョンを用いた。

6. 倫理的配慮

保護者におけるSDQについては、4歳児発達相談の案内文で今後の相談のあり方に関して説明を行い、同意の意思は調査用紙に回答者の署名を得ることで確

認した。また、調査の分析にあたっては記号化を行い個人が特定できないように配慮した。

Ⅲ. 結 果

1. SDQスコアの平均値について

(1) 平均値の評価(支援の必要性について)

表2に示したとおり、年齢別(4～6月生群/1～3月生群)・性別(男/女)・評価者別(保護者/保育者)のSDQスコアの平均値で、支援の必要性を示す[Some Need](支援の必要性がややある)以上に該当するスコアとなったのは、保護者評価の⑤向社会性の4～6月生群の男児(SDQスコア5.92)と同じく保育者評価の⑤向社会性の1～3月生群の男児(SDQスコア5.29)の2項目であった。⑤向社会性は逆転項目であるので、6点未満が支援の必要性がある判定となる。支援の必要性を示す[Some Need]と評価されたカテゴリーは、年齢に関係ない評価となっており、評価者による違いも少なかった。

その他のSDQスコアの平均値は、支援の必要性がほとんどないと判定される[Low Need]の範疇であった。

(2) 年齢別の平均値の評価(4～6月生群と1～3月生群の単純比較)

SDQスコアの評価は、①行為面、②多動・衝動性、③情緒面、④仲間関係に関しては、数字が大きくなるほど支援の必要性を示す。⑤向社会性に関しては、数字が小さいほど支援の必要性を示す。

各カテゴリーの年齢別の評価を単純比較したところ、4～6月生群のスコアが1～3月生群のスコアを上回っていた項目(向社会性では、下回っていた)は、保護者評価では①行為面;男女とも、③情緒面;男児、④仲間関係;男女とも、⑤向社会性;男児で、6項目において上回っていた。保育者評価では③情緒面;女児、④仲間関係;女児で、2項目であった。

(3) 男児と女児の評価

③情緒面を除き、全てのカテゴリー・項目で、男児の平均値が女児の平均値を上回って(逆転項目では下回って)いた。③情緒面では、保護者評価の1～3月生群と保育者評価の4～6月生群で、女児が上回っていた。

⑤向社会性では、思いやりや優しさを評価しており、質問内容は、「他人の気持ちをよく気づかう」、「他の子どもたちと、よく分け合う」、「誰かが心を痛めてい

表2 SDQ カテゴリーの評価者別の平均得点と標準偏差

		4～6月生群 (4～6生まれ児)			1～3月生群 (1～3生まれ児)		
保護者評価	SDQ カテゴリー	合計 [47]	男児 [26]	女児 [21]	合計 [60]	男児 [29]	女児 [31]
	①行為面	3.09 (2.03)	3.12 (1.97)	3.04 (2.16)	2.73 (2.04)	2.66 (2.14)	2.81 (1.97)
	②多動・衝動性	3.21 (2.15)	3.58 (2.04)	2.77 (2.23)	3.75 (2.13)	4.10 (2.38)	3.41 (1.84)
	③情緒面	1.96 (1.85)	2.00 (1.92)	1.90 (1.81)	1.93 (2.05)	1.86 (2.10)	2.00 (2.03)
	④仲間関係	1.96 (1.79)	2.15 (2.09)	1.70 (1.30)	1.83 (1.77)	2.10 (1.99)	1.60 (1.54)
	⑤向社会性 (逆転項目)	6.45 (2.19)	5.92 (2.02)	7.10 (2.26)	6.28 (1.96)	6.14 (2.07)	6.42 (1.88)
保育者評価	SDQ カテゴリー	合計 [59]	男児 [31]	女児 [28]	合計 [68]	男児 [34]	女児 [34]
	①行為面	1.07 (2.02)	1.29 (2.52)	0.82 (1.25)	1.19 (1.95)	1.53 (1.97)	0.85 (1.89)
	②多動・衝動性	2.31 (2.78)	2.58 (3.09)	2.00 (2.41)	3.49 (2.99)	4.68 (3.11)	2.29 (2.34)
	③情緒面	1.64 (2.36)	1.42 (2.57)	1.89 (2.59)	1.39 (1.87)	1.61 (1.82)	1.18 (1.91)
	④仲間関係	1.20 (1.82)	1.26 (1.77)	1.14 (1.90)	1.19 (1.74)	1.76 (2.12)	0.62 (0.99)
	⑤向社会性 (逆転項目)	7.02 (2.31)	6.45 (2.43)	7.64 (2.02)	6.19 (2.27)	5.29 (2.25)	7.09 (1.93)

注) 表中の [] 内の数字は人数, () の数字はSD, 斜体字は Some Need を示す。
表中の太字は, 4歳児 > 3歳児 (⑤向社会性は <) となっている数字を示す。

表3 SDQ カテゴリーの属性別の分散分析・多重比較検定の結果 (Bonferroni/Dunn 法)

種別	比較項目	SDQ カテゴリー		行為面		多動・衝動性		情緒面		仲間関係		向社会性	
		平均値の差	有意差	平均値の差	有意差	平均値の差	有意差	平均値の差	有意差	平均値の差	有意差		
保護者評価	4～6月生群男児, 1～3月生群男児	0.46		-0.53		0.14		0.05		-0.21			
	4～6月生群男児, 4～6月生群女児	0.07		0.82		0.10		0.45		-1.17			
	1～3月生群男児, 1～3月生群女児	-0.15		0.68		-0.14		0.50		-0.28			
	4～6月生群女児, 1～3月生群女児	0.24		-0.66		-0.10		0.10		0.68			
保育者評価	4～6月生群男児, 1～3月生群男児	-0.24		-2.10 *		-0.14		-0.51		1.16			
	4～6月生群男児, 4～6月生群女児	0.47		0.58		-0.47		0.12		-1.19			
	1～3月生群男児, 1～3月生群女児	0.68		2.38 **		0.38		1.15 *		-1.79 **			
	4～6月生群女児, 1～3月生群女児	-0.03		-0.29		0.72		0.53		0.55			
4～6月生群	保護者男児, 保護者女児	0.07		0.82		0.10		0.45		-1.17			
	保護者男児, 保育者男児	1.83 **		1.00		0.58		0.90		-0.53			
	保護者女児, 保育者女児	2.23 **		0.76		0.01		0.56		-0.55			
	保育者男児, 保育者女児	0.47		0.58		-0.47		0.12		-1.19			
1～3月生群	保護者男児, 保護者女児	-0.15		0.68		-0.14		0.50		-0.28			
	保護者男児, 保育者男児	1.13		-0.57		0.30		0.34		0.84			
	保護者女児, 保育者女児	1.95 **		1.13		0.82		0.99		-0.67			
	保育者男児, 保育者女児	0.68		2.38 **		0.38		1.15 *		-1.79 **			

注) 表中の * は有意水準 5%, ** は有意水準 1% を示す。

たり, 落ち込んでいたり, 嫌な思いをしている時など, すすんで助ける, 「年下の子どもに対してやさしい, 「自分からすすんでよく他人を手伝う」の5つとなっている。これらの内容は, 幼児においても「女の子らしさ」を評価する内容になっていると考えられる。

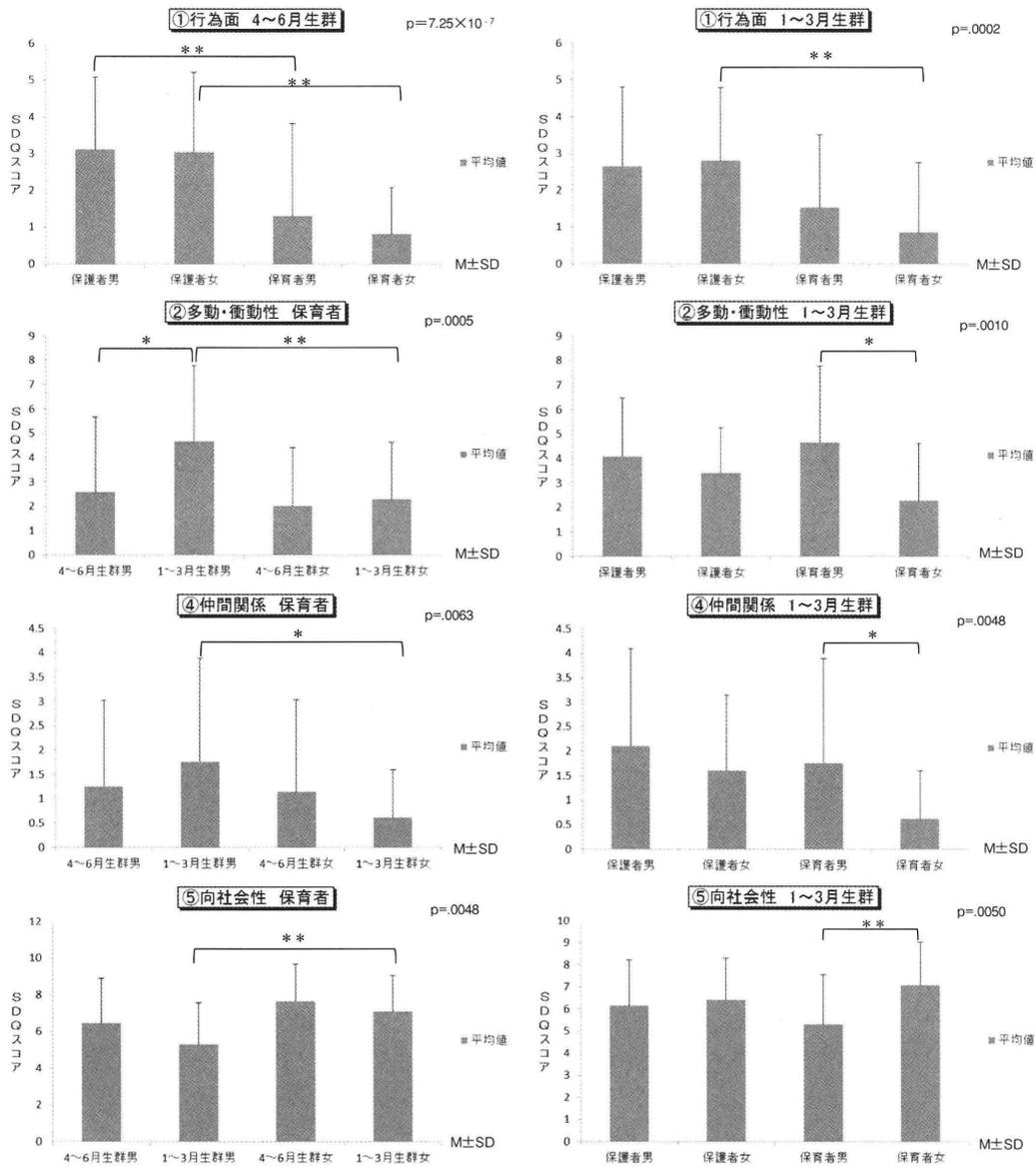
野田ら¹¹⁾の研究によると, SDQ の保護者評価における向社会行動の年少児の平均値を見ると, 男児が 5.68 (SD2.00) で女児が 6.50 (SD1.87), 差が 0.82 となっている。西村ら¹²⁾の研究によると, 保育者における向社会性の得点の平均値は, 男児が 5.29 (SD2.85) で女児が 6.80 (SD2.64), 差が 1.51 となっている。本研究に

おいて, 有意差が認められた保育者の男女差は, 4～6月生群で男児が 6.45 (SD2.43) で女児が 7.64 (SD2.02) で, 差が 1.19 であった。1～3月生群では, 男児が 5.29 (SD2.25) で女児が 7.09 (SD1.93), 差が 1.80 であった。先行研究と同様な結果となっていた。

2. SDQ の平均値のカテゴリーごとの差について

有意差が認められたカテゴリー・項目 (分散分析結果)

表2には, 評価者別に各カテゴリーのSDQスコアの平均値と標準偏差を示した。表3には, 分散分析・多重比較検定結果 (平均値の差) を示した。図には,



注) 図中の*は有意水準5%, **は1%を示す。

図 SDQ カテゴリーの属性別の平均値と標準偏差 (有意差ありのみ)

表3の有意差が認められた属性ごとの平均値と標準偏差のグラフを示した。

一元配置分散分析・多重比較検定 (Bonferroni/Dunn 法) の結果, ③情緒面以外のSDQ カテゴリーで有意差の認められる平均値の差が生じていた。

年齢による平均値の差については, 保護者評価の4~6月生群と1~3月生群の平均値の差について, 有意差が認められるSDQ カテゴリーはなかった。保育者評価では, 男児のみに②多動・衝動性で-2.10の差が生じ, 1~3月生群の平均値が有意に高くなっていた。他のSDQ カテゴリーでは, 差は認められなかった。

4~6月生群では, ①行為面のみ, 保護者と保育者の評価者の差が認められた。

1~3月生群では, ③情緒面以外のSDQ カテゴリー

で有意差の生じる状況であった。1~3月生群では, ①行為面では, 女児で評価者の違いが認められ, ②多動・衝動性, ④仲間関係, ⑤向社会的性では, 男児と女児間の性別による違いが認められた。

Matsuishi¹³⁾によると, 日本語版の保護者評価ではTDSと行為面, 多動性, 仲間関係の平均得点は男児が有意に高く, 情緒面, 向社会的性では, 女児が有意に高いと報告されている。本研究においては, 保護者評価では, 男児と女児の差に全てのカテゴリー・項目で, 有意差は認められなかった。保育者評価では1~3月生群において, ②多動・衝動性, ④仲間関係, ⑤向社会的性の3つのカテゴリーで, 男児と女児の差に有意差が認められた。

IV. 考 察

1. 結果のまとめ

同じ属性における比較において、②多動・衝動性の保育者評価の男児以外には、年齢間の差は認められなかった。西村ら¹²⁾によると、保護者に比べ保育者は、多動性の問題に注目しやすい傾向があり、SDQ 自体、AD/HD、行為障害などに関連があるとされていることから、本研究においても同様な結果となったといえる。

年齢による同じ属性ごとの比較ではなく、4～6月生群と1～3月生群それぞれの同じ属性による状況を見てみると、1～3月生群のみにばらつきがみられたカテゴリーが、②多動・衝動性、④仲間関係で、どちらも保育者評価の1～3月生群の女児のスコアが低かった。4～6月生群だけにばらつきがみられたカテゴリーはなかった。このことから、1～3月生群において評価者による性別の差異が生じる可能性が示唆された。

保育者評価の1～3月生群の男児以外は、保護者の評価スコアは保育者より高かった。このことは保護者がわが子と深い愛着関係を形成していると考えられるので、多くの保護者は自分の子どもに対して保護者の思いや願いが含まれている可能性があり、客観的に観察することは不可能で、自分の子どもの優位性を中心に他の子どもたちを見ていることの反映であると考えられる。特に、①行為面、②多動・衝動性、④仲間関係について統計的に有意な差が保護者と保育者および男児と女児との間にみられたことは、このことを裏付ける根拠になろう。すなわち保育者の場合は、発達的な知識を有し、同年代の子どもたちと比較しながら客観的に観察できるために、①行為面については適切な評価が可能である。また④の仲間関係については集団内で当該児を他の子どもと比較することが可能である。保護者の場合は、①行為面や④仲間関係について発達的な知識も十分でなく、また集団内で自分の子どもを観察できる状況ではないために推測して評価せざるを得ないために、「こうであってほしい」、「こうなってほしい」といった理想像を追う評価（成長の期待度）となり、保育者に比べ厳しい評価になったと考えられる。評価者によるSDQ評価の違いについて、大神¹⁴⁾は、無理やり修正するのではなく、家庭ではそのような行動が観察されていない可能性を踏まえて園での様子を

伝えるなどの対応が必要と述べている。

他のカテゴリーについては、保育所や幼稚園のような集団という条件がなくとも評価できるために両者に著しい差異がみられなかったといえる。

2. 「1～3月生まれ児」（1～3月生群）に対するSDQの適用について

4～6月生群と1～3月生群の発達状況等から、1～3月生群の平均値が4～6月生群の平均値を上回ることが想定されたが、結果としては、4～6月生群が上回る結果となっていたカテゴリーが保護者評価では6項目、保育者評価では2項目あり、保護者評価で多くみられた。

同じ属性間の比較では、②多動・衝動性の保育者評価における年齢間で有意な差が認められたが、その他のカテゴリーや保護者評価では、年齢間の差は認められなかった。

有意差が認められた保育者評価の②多動・衝動性の男児の平均値は4.68 (SD3.11) で、SDQ 評価基準の [Low Need] (0～5点) の範疇であり、この結果から、SDQ 評価には、4～6月生群と1～3月生群には大差はなく、満4歳に満たない年少児にもSDQが適応できると考えられた。

保護者と保育者の評価の違いを見ると、いずれのカテゴリーにおいても保護者の評価スコアが保育者に比べ [Some Need] (支援の必要性がややある) に近くなっていた。特に①行為面と④仲間関係、⑤向社会性でその傾向がみられた。これらの所見は保護者のわが子に対するありうるべき態度を反映した結果であると考えられる。保護者と保育者の評価が同じであることは、保護者が保育者経験などを有したり、この領域の専門家であつたりしない限り生じない可能性が高いと考えられる。大神¹⁴⁾は、評価者である保護者と保育者による「ずれ」に関して、保育者が何らかの側面で「心配」レベルと評定している子どもに対し、保護者は「心配なし」と認識していると述べており、西村ら¹²⁾は、保育者は保護者に比べ多動性の問題に注目しやすく、向社会性については保護者より控え目に感じていると述べている。

本研究においても、評価者による評価の違いが明らかになった。

なお本研究において、カテゴリーごとの平均得点は、おおむね支援の必要性がないと判定される [Low

need] の範囲内であった。男児において、⑤向社会性の平均スコアが保護者の4～6月生群と保育者の1～3月生群で[Some Need]の範囲となったが、このことも、保護者においては、子どもの成長に対する期待度により、判定が厳しくなる傾向が考えられた。

保育者においては、集団間の比較による評価の影響を受けているものと考えられる。

3. 4歳児発達相談におけるSDQの課題

SDQは、保護者や保育者が5分程度でチェックすることが可能な行動スクリーニングで、子どもの特性が容易に把握される¹⁰⁾といわれている。実際、4歳児発達相談の問診として活用したところ、保育者からは負担の声を聞かなかつた。しかし、保護者は、集団活動の場面での子どもの様子を知らないことが多く、答えにくいといった声も聞かれている。このようにSDQによる評価は技術的に解決できる課題である。

近年、乳児期から保育所を利用している家庭も増加している。さらには、子育て世代の育児不安や子ども虐待等を抱える家庭の増加も指摘され、3歳までの「母子の愛着形成」が十分でない家庭が少なからず存在している。4歳前後の子どもは、発達心理学的には個人差が顕著になる時期であると指摘されている。この年齢に至るまでは「母子の愛着形成」のプロセスであり、また「親離れ」（集団活動の開始）の時期でもある。この「親離れ」を上手く経験するためには、集団活動に入る前の「3歳児」の段階における、十分な「母子の愛着形成」が必要となる。成田¹⁵⁾は、この時期の発達を促進させる要因として、母子間の愛着形成や、母子間の言語によるポジティブなコミュニケーションが関与すると述べている。また、Bronson¹⁶⁾は、自発的に自分自身の行動を意識的にコントロールする能力として「自己調整能力」があると述べているが、この能力も4歳前後からゆっくりと発達を始めるといわれている。「自己調整能力」の発達は、多動・衝動性との関連が考えられる。

こうしたことから、年少児（3歳児クラス）を対象とした発達相談スクリーニングを行う際、SDQで得られた評価の裏付けのために、母子間の愛着形成やそれと関連する家庭における子育ての状況、すでに考察でもふれたように発達の状況や集団内での行動特性、さらに自己調整能力などをスクリーニング指標として、総合的に判定できるシステムを構築する必要がある。

謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただきました御嵩町の4歳児の保護者、保育者の皆様に深く感謝いたします。また、ご指導くださいました中部学院大学 堅田明義教授、山崎捨夫教授に心より感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は、日本発達障害学会第48回研究大会において発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 日本発達障害福祉連盟編. 発達障害白書 2011年版. 2010: 9-12.
- 2) 神尾陽子. ライフステージに応じた自閉症スペクトラム者に対する支援のための手引. 国立精神・神経センター精神保健研究所, 2010: 21-22.
- 3) 辻井正次, 中島俊思. 発達障害児支援に向けた効果的な乳幼児健診のあり方. 地域保健 2010: 9: 32-39.
- 4) 中田洋二郎. 発達障害と家族支援. 学研, 2009: 4-5.
- 5) 小枝達也. 5歳児健診 発達障害の診療・指導エッセンス. 診断と治療社, 2008: 3-4.
- 6) 小枝達也, 下泉秀夫, 林 隆, 他. 軽度発達障害児に対する気づきと支援マニュアル. 厚生労働省, 2007: 1-2.
- 7) Goodman R, Ford T, Simmons H, et al. Using the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) to screen for child psychiatric disorders in community samples. British Journal of Psychiatry 2000; 177: 534-539.
- 8) 小枝達也. 軽度発達障害児への気づきと対応システム—ちょっと気になる子たちの幸せを願って—今後の展開. 小児保健研究 2007; 66: 207-209.
- 9) 山下裕史朗, 飯塚千穂, 大矢崇志, 他. 日本人就学前児のSDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire) スコア. 小児の精神と神経 2007; 47 (3): 187.
- 10) 社団法人東京都医師会次世代育成委員会編. 5歳児健診事業—東京方式—. 東京都医師会, 2010: 15-16.
- 11) 野田 航, 伊藤大幸, 藤田知加子, 他. 日本語版SDQ親評定フォームについての再検討 単一市内全校調査に基づく学年・性別の標準得点とカットオフ値の算出. 精神医学 2012; 54 (4): 383-391.

- 12) 西村智子, 小泉令三. 日本語版 Strengths and Difficulties uestionnaire (SDQ) の保育者評価. 福岡教育大学紀要 2010 ; 59 (4) : 103-109.
- 13) Matsuishi T, Nagano M, Arai Y, et al. Scale properties of the Japan version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) : A study of infant and school children in community samples. Brain & Development 2008 ; 30 : 410-415.
- 14) 大神優子. 「気になる子」に対する保育者と保護者の評価—SDQ を利用して—. 和洋女子大学紀要 2011 ; 51 : 179-187.
- 15) 成田奈緒子. 脳と心の豊かな発達…子どもの脳はどう育つのか. 食べもの文化 2005 ; 12 (355) : 21-25.
- 16) Broson MB. Self-regulation in early childhood : Nature and Nurture. New York : Guilford Press, 2000.

[Summary]

The Strengths Difficulties Questionnaire (SDQ) was used in selecting the subjects of developmental consultation for 4-year-old children among first-year kinder-

garten students (class starting when children are 3 years old), but some of the subject children had not yet turned four years old and questions arose about its use. We therefore compared the mean SDQ scores of parents and kindergarten teachers for two years in children born in the months of April to June and January to March for each category, and found significant differences in hyperactivity/impulsiveness and sociocentricity in the kindergarten teachers' assessments of boys. The assessment of the need for support was generally within the range of "low need". While investigations based on things such as how best to assess the development of individuals within a group and the course development are still needed, the findings suggest that the SDQ can be used in simple screening.

[Key words]

early detection and early care support,
developmental consultation for 4-year-old children,
SDQ